

大原の里と比良の山

大原のオオムラサキを守る会
蓬 萊 む し の 会
第 29 号 2026.8.10

ブラジルの野鳥はたくましい

的場 亮一

今から 14 年前の 2012 年 10 月、昔の仕事仲間でブラジル人の知人を訪ねて 1 週間ほどお世話になったことがある。当時は円が強くて、記憶では 1 USD が約 78～79 円で 80 円未満。現在のまさに倍の円高で、おかげで遠いところまで長期の旅行ができた。なにが原因なのか、なんとまあ日本は貧乏な国に落ちぶれてしまったことか！今更嘆いても始まらないが、実に情けない。

しかし、今回の話題はそんなことではなく、ブラジルでみたラテン系の情熱たっぷり、迫力満点の野鳥の話。知人は長年 Sao Paulo 州の Campinas という町にすんでいて、彼の広い平屋の自宅がある住宅地の外周は高い塀で囲まれ、住宅地のゲートにはマシンガンを持った警備員が 24 時間検問に当たっている、とても安全な高級住宅地だった。ブラジルにはファベラと呼ばれる、急斜面に密集した貧民街があちこちにあり、治安も悪く社会問題にもなっていた。そんな地域とはまさに雲泥の差で、格差社会を目の当たりにみた。

ある日の午前中たまたま近所をぶらぶら探索してみようとカメラを持って家を出た時のこと。自宅前の道路でなにやら野鳥がはげしく争っていた。目前で繰り広げられる熾烈な戦いに圧倒され、動画にも撮ることなど全く思いつかなかったが、あの時動画に撮れていたら、その迫力満点のすさまじい戦いが記録できたのに、と今になって思う。

何事か？ 事情も把握できぬまま、慌ててカメラを連写モードにセットしシャッタースピードもごく短くセットし、争う彼らを撮りまくった（図 1）。二羽はお互い取っ組み合い、もつれてみたり、数mも離れてみたりと、実に激しく飛びまわるため、なかなかファインダーで追いかけるのが難しい。それにしても、激しい争い。何が争いの原因なのか知らないが、とにかくその激しさにファインダー越しながらも圧倒された。



図 1 路上で激しく争う 2 羽

争う2羽にフォーカスし夢中でシャッターを切っていたため、最初気が付かなかったが、なんと争う2羽のほかにもう一羽、観戦者(?)がいることに気が付いた。

なるほど、これで状況が理解できた。つまり一羽のメスを自分のものにしたいくて、2羽のオス同士が争っている、野鳥の三角関係だった。さすがはラテン系の情熱的な野鳥たち！メスのためにここまで熾烈な争いをするとはと、大きな驚きとともに彼らの体力もさることながらすさまじい気迫に圧倒されてしまった。

何分くらい経ったろうか。いつの間にか戦いの場は、道路わきの草地に変わった。両者は上になり下になり、つかみ合いになったかと思うと、さっと離れ、空中約70~80cmからくちばしを突き刺すかのように、垂直に急降下で突撃する。重力だけによる落下ではなく、明らかに羽ばたき勢いをつけていた(図2)。

一方メスはいえ、すぐそばでじっと動かず冷静に戦いの成り行きを観察している。きっと「どちらのオスが強いのだろう？強い元気な子を産むために、私の体は強い方に任せよう。」とでも考えているのだろう。とても落ち着いたメスの態度に驚くと同時に、したたかな気に入らないメスだと、感じたことを記憶している。いつの間にか、男性目線で見えていた。女性だったらどう思っただろうか。なんと図々しいガサツで乱暴なオスども、とても思ったかもしれない。

本の題名は忘れたが、以前図書館から借りた動物行動学に関する本に、日本のツバメのメスがオスを選ぶ際の選考基準がいくつか載っていた。①まず重要なのは長くて美しい尾羽を持っていることで、左右対称で傷もなく艶がある美しい尾羽のオスが好まれる。そんな尾羽を維持するには、十分栄養をとり、高い飛翔能力を持ち、病気や寄生虫も少ない、健康状態がいいことを表しているからとのこと。なるほど理に適っている。②次に、繁殖の観点から、雨風が防げて天敵が少なく、人の出入りも適度でカラスなどが近づきにくい安全な場所を確保してくれているオスが好まれる。③昆虫を捕まえたり、急旋回、高速飛



図2 激しく争う2羽と1羽の観戦者

行のできる運動能力に優れていること。④捕まえた昆虫をメスによくプレゼントするオスは、餌を確保する能力が優れているとみなされ評価される。詳しくは忘れたがほかにもいくつか評価ポイントがあった気がする。しかしこうしてみるとツバメのメスも冷静にオスを評価しているようだ。

ブラジルのこれらメスのオスに対する選考基準も同様かと思う。戦いに強いオスは健康的でたくましく、その結果厳しい自然界でも生き延びる力が大きい、そんなオスの遺伝子をもらったら、自分が産み育てる子供たちもまた強くなり生存競争でも勝者になれる、といった考えに基づいているはず。たとえそこまではっきりとした考えはなくとも、本能的に体がそのように反応するのだろう。

そうこうしているうちに戦いは新たな局面に変わった。ついに勝者が決まったようで、勝ったオスは先ほどまで、成り行きを観察していたメスにあっという間にマウンティング(図3)。戦いに敗れたそばにいるオスのしぐさが、なんとも哀れにみえた。50~60 cm離れたところで、翼をばたつかせながら、取られたメスにまだ未練があるのか、あるいはまるで負け惜しみとも見える動きを見せていた。しかし交尾中のカップルにはまったく相手にもされず、みじめったらしい敗者のオスについて同情してしまった。それにしてもブラジルのこの勝ったオスはたくましく、その戦い方も実に激しかった。日本でも野鳥の世界ではこんな争いが頻繁に生じているのだろうか？まだ一度も見たことがない。

ところでこの鳥を調べてみたところ、南米の特にブラジルに生息するマミジロマネシツグミ(学名: *Mimus saturninus*) のようだ。英語名は Chalk-browed mockingbird。そういえば昔パティ・ページが歌っていた「Mockingbird hill」は大好きな曲の一つだった。

これまで知らなかったが、図書館から借りた「鳥たちの素敵な名前の物語」(*)にこんなことが載っていた。ツグミの古名は「しなひ」や「しなひとり」が知られているそうだ。

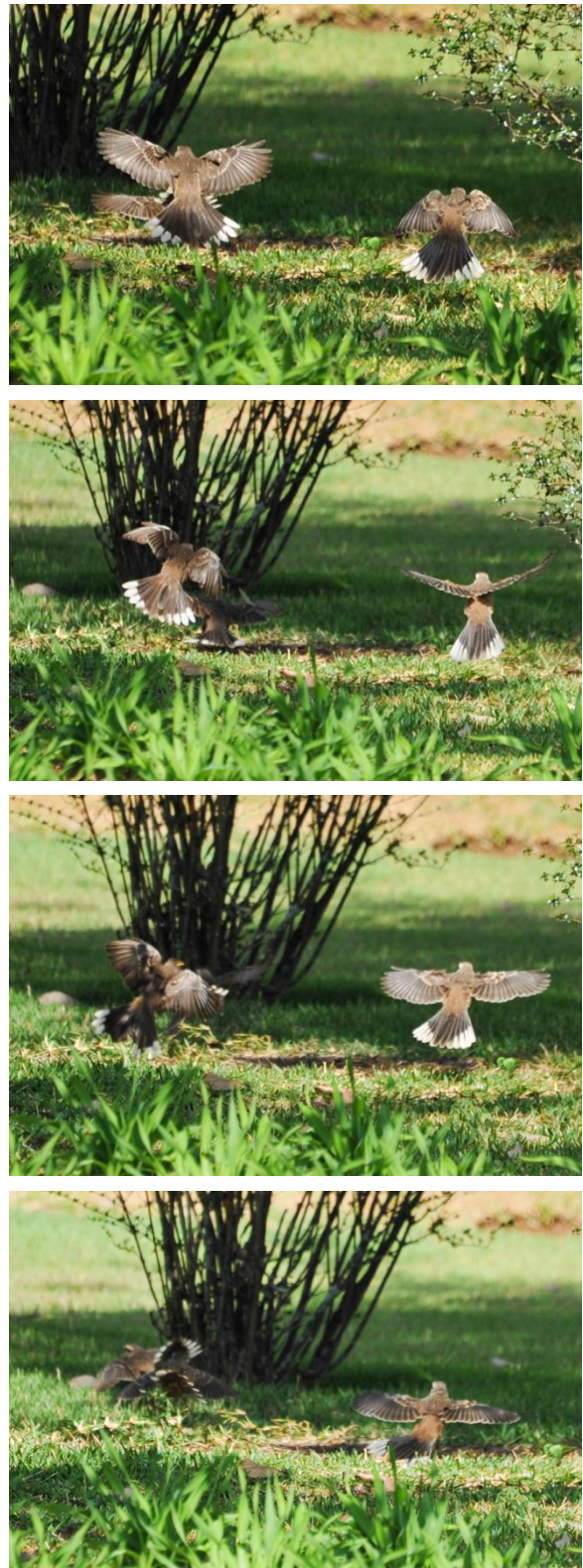


図3 勝負あり、敗者には残酷な光景
(左の2羽がカップルで、右が敗者)

一方、「つくみ」という単語は奈良時代の「出雲国風土記」や平安時代の「倭名類聚抄」にも見られる。語源として、「大言海」では口をつぐむという動詞から発したもので、「夏至が過ぎるとなかなくなるので、口をつぐむの意」からと記述されているが、夏には観られない冬鳥なので、この語源説は間違った説。現代でもいろんな説が考えられてきているが、有力説は「突く・実」説で、冬のツグミが木の実を突くようにして食べる様子を見て、生態を呼び名にしたものとした説。

それにしてもこれほど身近なツグミの語源が未だに不詳というのも面白い。

＊ 「鳥たちの素敵な名前の物語」 大橋弘一 著 文一総合出版

大原の柴漬け

牧野 茂樹

発行されている「大原の里と比良の山」のタイトルにご縁を感じていまして、その由はのちに話すとして、今回は旬の話しをしようと思います。大原の里には、平安時代の建礼門院さまが名付けたとされる柴漬けがあり、聞くとところによると里人が献上した紫色の漬け物の美味しさに、そのような素晴らしい名をつけられた。共に過ごされた阿波内侍（あわのないし）さまも柴漬けを御飯に合わせて美味しく食べられたことでしょう。

大原に通うようになり、14年が経ちますが、やっと美味しい柴漬けが作れるようになったと思います。辻しばのご主人に聴いて、さらに直接作り方を体験させて頂き、今年も早くも2回目を漬けています。塩と赤紫蘇、茄子を混ぜて、重石をすると、本当に僅かな体積になります。白米に柴漬けだけで、暑い夏もいけます。乳酸発酵が作るパワーの素晴らしいところでしょうか。

冬の保存食と聞きますが、我が家は正月の頃、小さな樽は底を突きます。つつい箸が進み、一冬はないのです。

最後に、比良の武奈ヶ岳を眺めて30年程、過ごしました。今も、週に一度は山を見ながら、コーヒーを楽しんでいます。コーヒー豆を焼いて、第二の人生をスタートさせています。



辻しば漬本舗

キマダラルリツバメの吸水行動

小松 清弘

2026 年 6 月 11 日、いつものように宝ヶ池にウォーキングに行った時のことである。北園から桜の森を通り池に出て、遊歩道を菖蒲園に向かった。会議場の横を過ぎて道は両側が木立になった。朝の光が木漏れ日となって射していた。

2 日前に降った雨で湿った地面にシジミチョウが止まっていた。どうも吸水しているようである。位置の具合で何なのかわからない。わずかに開いた翅に木漏れ日が当たって青紫色が見えた。しばらく考えてやっとキマダラルリツバメであることがわかった。特徴の裏面の縞模様は見えない。

今年初めて見るキマダラルリツバメである。毒ビンとビニル袋は持っているものの網がない。とっさに被っていた帽子を脱いでそっと近づき被せた。

帽子で採るときはここからが難しい。帽子の上を押さえながら静かに端からめくっていく。見つけたらさっともう一度被せて上から静かに押さえる。帽子をとって押さえた個体を取り出す。これがなかなかうまくいかない。多くの場合うまく押さえられていなくて帽子をとったとたん飛んで逃げられてしまう。

今回もやっぱり帽子を取ったとたん逃げられてしまった。しばらく近くを飛び回った後にどこかへ消えてしまった。

あきらめきれずに止まっていたあたりを見たらもう 1 頭止まっているではないか。と思ったら飛び立った。でもまた地面に止まった。今度も慎重に近寄って帽子を被せた。端から慎重にめくってみていくと、裏面の縦縞模様が見える。さっともう一度被せて上から押さえる。帽子を取ると幸いにも地面にはキマダラルリツバメが横たわっていた。今年初の採集品である。ビニル袋に収める。後日展翅したのが図 1 である。

キマダラルリツバメを池の遊歩道で見たのは初めてだった。おまけにキマダラルリツバメが吸水するとは思わなかった。ただ残念に思ったことは写真に撮っておかなかったことである。本当に吸水していたのだろうか。以前にもこのような経験を何度もしてきた。採集する前に観察して撮影する。それがなかなかできない。すぐに網を振ってしまう。これはなかなか治らない。採り屋（採集人）の性なのだろうか。



図 1 キマダラルリツバメ（左；表面、右；裏面）

オオムラサキは一度に何個産卵するか(2) -206 の大卵塊を発見-

藤野 適宏

飼育網室での累代飼育は 2013 年から始まり、途中途絶えた年もあったが、現在まで継続してきた。2026 年の蛹化数は近年の中では少ない方であったが、羽化成虫の早期死亡率が低く、元気な成虫が多いという特徴があった。それによるためか産卵活動も活発で、大卵塊を見ることが多かった。

飼育網室での諸作業の合間に大卵塊の写真を撮った。撮影日は 7 月 10 日、16 日、19 日、29 日で合計 8 卵塊を撮影した。撮影した卵塊は拡大印刷して卵塊ごとの卵数を数えた。その数は、多い順に①206 (図 1)、②176 (図 2)、③126 (図 3)、④108 (図 4)、⑤102 以上 (図 5)、⑥100 (図 6)、⑦98 (図 7)、⑧73 (図 8) であった。

このうち⑤の 102 以上というのは孵化の最中で、卵と 1 齢幼虫が入り混じって正確に数えられなかったことによる。また、⑧の 73 個が付着していた葉の周辺が食われていて、卵を避けて葉を食うことがわかって興味深い。ただし食ったのは時期的にオオムラサキ以外の鱗翅目の幼虫だと考えられる。

筆者は 2025 年に「オオムラサキは一度に何個産卵するか」と題して、同じ飼育網室で 110 個の卵塊を発見したことを報告している¹⁾。またそこでは 189 個という記録もあることも記している²⁾。今回の①の 206 卵というのはそれを越えた数で、最大の記録かどうかはわからないが、特記すべき大卵塊といえるだろう。しかし一方でこれらの記録は産卵中の観察ではないので、本当に一度の産卵によるものだという確証はない。

引用文献

- 1) 藤野適宏：オオムラサキは一度に何個産卵するか、大原の里と比良の山 10、7、2025
- 2) 白水隆：日本産蝶類標準図鑑、241、2006. 学研



図 1 206 個 2026. 7. 16



図 2 176 個 2026. 7. 19



図 3 126 個 2026. 7. 16



図 4 108 個
2026. 7. 29



図 5 102 個以上
2026. 7. 16



図 6 100 個
2026. 7. 10



図 7 98 個
2026. 7. 16



図 8 73 個
2026. 7. 29

大原 いのちの季(とき) 葉月

ヘクソカズラ

日当たりのよい草藪や樹木、フェンスなどに絡みつきかわいいラッパ状の小さな花を咲かす植物がよく見られます。アカネ科のヘクソカズラです。

ヘクソとは屁糞すなわちおならと便のことです。何とかかわいそうな名前でしょう。この名前は万葉集にも読まれていて大昔からそう呼ばれていたようです。葉などをもむと何とも言えない悪臭が漂ってきます。この臭いが名前の由来です。臭いの成分はメルカプタンといいます。人の体内でも作られおならや便の臭いの原因物質です。悪臭で有名なスカンクのおならの成分もメルカプタンです。人はメルカプタンに大変敏感なためにガス漏れ検知のためにガスの臭い付けにも使われています。ヘクソカズラでは葉などがかじられるとメルカプタンを発生させ、虫を追い出すのに使われているようです。



でもあまりにかわいそうな名前だということで名前を変えようという動きもあったようです。中心の赤い小さな白い花が田植えをする娘(早乙女)のかぶる笠に似ていることからサオトメバナとも呼ばれているので、そちらに変えたらどうかというものでしたが、一般に受け入れられませんでした。



なおヘクソカズラには花を伏せて置いた姿が灸に見えることからヤイトバナという別名もあります。

臭いで嫌われるヘクソカズラですが、秋にできる果実は薬や化粧品の材料に使われる有用植物でもあります。乾燥させると臭わなくなるのでクリスマスのリースの材料としても人気があります。(文 小松清弘 写真 的場亮一)

<7月おもな活動の報告>

◆7月1日(水) 10:00～、13:00～ (報告者:奥谷)

○参加者 藤野、塩尻、木村、的場、大友、奥谷、計6名

○活動内容

(午前) 網室

- ・会議 ①本日の活動内容
②小松さんから、特別展示欠席予定日の表が送信された一返事を小松さんにする
- ・作業 ①成虫の管理ー第2網室内の成虫を第1網室に移動、給餌
②第1網室内のエノキの剪定 ③フジバカマ園の除草

(午後) 文化センター

- ・会議 ①パーティションの借用とポスターおよびパネルの印刷を学校に依頼した
②展示物、出展物ープロログ、特別展示の原稿分担と日程の確認
③チラシ、ハガキ的場さん制作D案を業者に印刷発注、ハガキを8日に各分担者に配布。各自が宛名書きして発送する
④ワークショップマニュアルと作り方の検討ー電気クラゲ、バランストンボ、におい袋。15日にマニュアルの最終検討と講習会
⑤共通確認ーオオムラサキの会員8名に発信されたメールは必ず見て全員に返信すること

◆7月8日(水) 10:00～、13:30～ (報告者:奥谷)

○参加者 小松、藤野、塩尻、木村、的場、大友、村上、奥谷、計8名

○活動内容

(午前) 網室

- ・会議 ①本日の活動内容 ②毎年この時期に孵化が見られるので確認すること
③文化センターの展示室ー仕切りが作られて塗装がなされた
④今後の調査; 1齢幼虫を1匹ずつエノキの葉に付けて袋掛けして頭殻を調べ、何齢で越冬幼虫になるか調査するー来週より一人5匹ずつ担当し、合計40匹調査
- ・作業 ①ルートセンサス ②成虫管理、給餌 ③卵、幼虫の観察
④網室外とフジバカマ園の除草 ⑤1齢幼虫の袋掛けー一人当たり5袋

(午後) 文化センター

- ・会議 ①特別展のチラシ200部印刷済; 100部学校に配布、ハガキは各自があて名書きして投函
②夏季事業の日程確認; パネル完成18日ー16日までに原稿完成、印刷は学校に依頼、パネル作成15日ーパネル原稿は12日までに藤野さんに送る
③2026年夏季事業打合せ(別紙資料参照); I. 特別展示「大原とびわ湖バレイの昆虫」 II. ワークショップ「科学遊びと昆虫標本づくり」 III. その他の準備物

◆7月9日(木) 10:00～14:15 (報告者:大友)

○参加者 大友、小松、的場 計3名

○活動内容: びわ湖バレイルートセンサス

◆7月15日(水) 10:00～、13:30～ (報告者:奥谷)

○参加者 小松、藤野、塩尻、木村、的場、大友、村上、奥谷、計8名

○活動内容

(午前) 網室

- ・会議 ①本日の活動内容
②ポスター掲示; コンビニ、文化センター、来隣、バス停に依頼
ハガキ; 各自が投函、チラシ; 生物多様性センターに配布
③標本づくり希望者現在5名

- ④頭殻調査用洗濯用ネット小ー80枚購入する；捜す必要あり
- ⑤網室の網の補修シート購入 ⑥パネル印刷；学校に依頼ー17日午後に受け取る
- ・作業 ①成虫管理、給餌 ②卵、幼虫の観察
- ③頭殻調査；先週袋掛けした袋内の幼虫を確認し新しい袋に交換
- ④フジバカマ園の除草

(午後) 文化センター

- ・ワークショップ講習会ー各テーマ毎に3名が試作実演し意見交換

◆7月16日(木) 13:00～ 文化センター (報告者：奥谷)

○参加者 小松、藤野、大友、奥谷、計4名

○活動内容

- ・作業 特別展示パネル作成 10枚
- ・打合せ 今後の作業、必要物品、必要購入物品について

◆7月17日(金) 13:00～ 文化センター (報告者：奥谷)

○参加者 小松、藤野、塩尻、的場、大友、奥谷、計6名

○活動内容

- ・作業 特別展示パネル作成掲示、標本展示、ワークショップの準備、展示準備

◆7月18日(土) 10:00～、13:00～、文化センター (報告者：奥谷)

○参加者 小松、藤野、塩尻、木村、的場、大友、村上、奥谷、計8名

○活動内容

(午前)

- ・会議 ①特別展示当番表配布
- ②ワークショップの材料ー机に出して置かずに希望者があれば配布する
- ③ワークショップの材料、道具ー土曜日曜はすべて引き上げる
- ・作業 特別展示、ワークショップの事前準備、会場設営

(午後)

- ・作業 ①特別展示、ワークショップの開催 (当番) 大友、奥谷
来館者3名、ワークショップ参加者4名
- ②昆虫標本づくり (担当) 小松、村上
参加者6名

◆7月22日(水) 10:00～ 網室 (報告者：奥谷)

○参加者 小松、藤野、塩尻、木村、大友、村上、奥谷、計7名

○活動内容

- ・会議 ①本日の活動内容 ②セブンイレブンの冊子の紹介 ③特別展示の状況
- ④標本づくり希望者2名追加ー本日標本づくり実施
- ⑤頭殻調査についてー先週袋を持ち帰り調査した結果、5袋中3つの頭殻を採集
調査方法の説明と今後の調査の方針；各自幼虫5匹を担当して調査する
- ・作業 ①ルートセンサス ②成虫管理、給餌 ③卵、幼虫の観察
- ④頭殻調査ー袋内の幼虫を確認し新しい袋に交換
- ⑤フジバカマ、網室外のエノキにポンプで散水

◆7月24日(金) 10:15～14:10 (報告者：大友)

○参加者 大友、小松、的場 計3名

○活動内容：びわ湖バレイルートセンサス

◆7月29日(水) 10:00～ 網室 (報告者：奥谷)

○参加者 小松、藤野、塩尻、木村、的場、大友、村上、奥谷、計8名

○活動内容

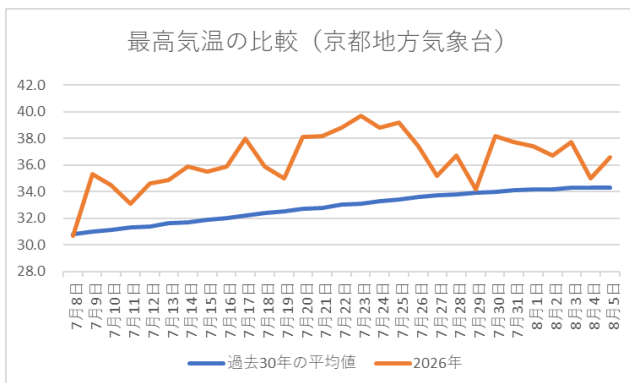
- ・ 会議
 - ① 本日の活動内容
 - ② 今年は卵塊、孵化した幼虫の数が多いー2 回目の放蝶が必要
 - ③ ワークショップの標本作りークワガタの展足を行う
 - ④ 文化センターギャラリー、展示場の会場費について
 - ⑤ 上田様より紹介ーオオムラサキの会の後継者について
 - ⑥ セブンイレブンフォーラムの交流会についてー情報交換のテーマ
気の付いた点があれば連絡を
 - ⑦ オオムラサキの会のホームページーコメント欄を閉鎖する
 - ⑧ フジバカマの白絹病が多いので薬剤散布が必要
 - ⑨ 頭殻調査ー網袋とサンプル瓶の紹介、袋替えは毎週行う
 - ⑩ 特別展示最終日の片づけー標本箱だけ撤収
- ・ 作業
 - ① 成虫管理、給餌 ② 卵、幼虫の観察 ③ 2 回目の放蝶
 - ④ 頭殻調査ー1 齢幼虫 1 匹だけを葉に付けて袋掛け；一人 5 匹ずつ
 - ⑤ フジバカマー薬剤散布

【あとがき】

圧倒的な暑さの夏である。エアコンがなければ命が維持できないというのは過言ではない。平年に比べて今年はどのくらい暑いのか、梅雨明けの 7 月 8 日から 8 月 5 日まで、京都地方気象台の記録から最高気温を比較してみた（右図）。

7 月 8 日を除いて常に平均値を上回っていたことにはもはや驚かないが、人間の体温を上回る 37℃以上の日が 12 回あって、そのうち 7 月 20 日から 26 日までは 1 週間

連続であったことには驚いた。これはヒトだけでなく、同じような生息域にいる多くの昆虫にとっても危機的な状況であろう。野外で見かける種類や数はめっきりと減少している。何とか耐え忍んでくれて、秋に再会できることを願わずにはいられない。（藤野）



= 目 次 =

ブラジルの野鳥はたくましい	1
大原の柴漬け	4
キマダラルリツバメの吸水行動	5
オオムラサキは一度に何個産卵するか(2) -206 の大卵塊を発見	6
大原 いのちの季（とき） 葉月 ヘクソカズラ	7
7 月おもな活動の報告	8
あとがき、目次	10

発行 大原のオオムラサキを守る会・蓬莱むしの会 2026 年 8 月 10 日 第 29 号

H P 大原のオオムラサキを守る会 <https://ohara-omurasaki.com/>

大原のオオムラサキを守る会代表 〒606-0044 京都市左京区上高野仲町 54 小松清弘

蓬莱むしの会代表 〒520-0105 大津市下坂本 1-40-16 大友正生

編集 〒611-0011 宇治市五ヶ庄西川原 21-151 藤野適宏